

いまにしゅういちろう

今西祐一郎

1946年、奈良県生まれ。京都大学文学部卒業。現在、九州大学文学部教授。

専攻 日本古典文学

主要著書に、『源氏物語覚書』『蜻蛉日記覚書』（岩波書店）、『蜻蛉日記』（校注。岩波文庫）、『通俗伊勢物語』『和歌職原鈔』（校注。平凡社東洋文庫）などがある。

古今集遠鏡 1（全2巻）

東洋文庫 770

2008年1月23日 初版第1刷発行

校注者 今西祐一郎

発行者 下中直人

印刷 創栄図書印刷株式会社
製本 株式会社 石津製本所

電話編集 03-3818-0742 〒112-0001

発行所 営業 03-3818-0874 東京都文京区白山2-29-4

振替 00180-0-29639 株式会社 平凡社

平凡社ホームページ <http://www.heibonsha.co.jp/>

© 株式会社平凡社 2008 Printed in Japan

ISBN 978-4-582-80770-7

NDC 分類番号 911.1 全書判(17.5 cm) 総ページ 238

乱丁・落丁本は直接読者サービス係でお取替えます(送料小社負担)

東洋文庫 770

平凡社

古今集遠鏡 1

本居宣長 著

今西祐一郎 校注

装
幀
原

弘

『古今集遠鏡』凡例

・本書は、本居宣長による古今集の俗語訳『古今集遠鏡』を2分冊で刊行する第1冊である。古今集巻十までをおさめる。底本には、寛政九年刊の版本（宇恵松蔵版）をもちい、下段に、稿本との異同を注記した。

・稿本は個人蔵の一本を用い、該本の明らかな誤字と判断される箇所については、本居宣長記念館蔵本を参照した。

・漢字は常用字体に改め、仮名は通行の字体に改めたほか、意味のとりにくい仮名表記には（ ）にいて漢字を傍書し、難読の漢字に同様の体裁で振り仮名を付したが、これらは最小限にとどめ、漢字の異体字は多く底本の字体を尊重するなど、なるべく原態を損なわないようにした。拗促音や漢字熟語を示す「ー」も、底本どおりとした。

・歌には国歌大観番号を付したが、江戸期に通行した古今集テキストでは現在のそれと順序の異なる箇所がある。

・底本には、訳文が当該歌の第何句の訳であるかを示す漢数字の傍書や、その句の訳の省略を示すために漢数字や上・下の字を四角囲みしたもの、また直接歌の言葉と対応しないが歌意をくみとるために補って訳している部分であることを示す傍線など、いくつもの記号が付されている。

これらの記号については、本書巻頭の「古今集遠鏡はしがき」に宣長による詳しい説明が備わる。

本書で新たに付した記号は、稿本との異同がある部分を示すアステリスク（*）である。

・ 稿本との異同は、振り仮名や傍書など、細部にわたって揭示したが、「む」と「ん」の異同、拗促音・熟字などを示す「ー」の有無については省略した。

・ 本書の編集に際しては、寛永九年刊版本と稿本それぞれ、および両者の対照画像から成る、九州大学附属図書館研究開発室編の『古今和歌集遠鏡画像データベース』を利用した。

・ 解説は第2分冊巻末に載せる。

目 次

一の巻

遠鏡序	9
-----	---

古今集遠鏡（はしがき）	11
-------------	----

（古今和歌集仮名序遠鏡）	27
--------------	----

古今和歌集卷第一遠鏡	57
------------	----

古今和歌集卷第二遠鏡	82
------------	----

二の巻

古今和歌集卷第三遠鏡	109
------------	-----

古今和歌集卷第四遠鏡	121
------------	-----

古今和歌集卷第五遠鏡	147
------------	-----

古今和歌集卷第六遠鏡	172
------------	-----

三の巻

古今和歌集卷第七遠鏡	183
------------	-----

賀歌

夏哥

秋哥上

秋歌下

冬歌

春歌下

春歌上

古今和歌集卷第八遠鏡	離別哥	192
古今和歌集卷第九遠鏡	羈旅哥	210
古今和歌集卷第十遠鏡	物名	219

〔第2巻目次〕

四の巻

古今和歌集卷第十一遠鏡	恋歌一
古今和歌集卷第十二遠鏡	恋歌二
古今和歌集卷第十三遠鏡	恋歌三

五の巻

古今和歌集卷第十四遠鏡	恋歌四
古今和歌集卷第十五遠鏡	恋歌五
古今和歌集卷第十六遠鏡	哀傷歌

六の巻

古今和歌集卷第十七遠鏡	雑歌上
古今和歌集卷第十八遠鏡	雑歌下
古今和歌集卷第十九遠鏡	雑体
古今和歌集卷第二十遠鏡	大歌所御歌・神あそびの歌・東歌・(墨滅歌)

解説(今西祐一郎)

古今集遠鏡

1

本居宣長 著
今西祐一郎 校注

遠鏡序

この遠鏡は、おのれはやくよりこひ聞えしまゝに、師のものしてあたへたまへるなり、この集はしも、よゝの注釈あまたあれども、ちうさくはかぎりありて、いかにくはしくときさとしたるも、なほ物へだてたるこゝちのするを、まことに書の名のたとひのごとく、ちとせをへだてゝ遠きあなたの世のこゝろふかき言の葉を、いまの世のうつゝの人のかたるをむかひて聞たらむやうに、こゝろのおくのくまもあらはに、はたらく詞のいきほひをさへに近くうつして、ちかくたしかに聞とらるゝ、この鏡のうつし詞は、おぼろけの人のなしうべきわざにはあらず、そのかみの世のこゝろことばを、おのがものと手のうちににぎりえたるわが師のしわざならではと、いともくたふとくめでたくおもひあふがるゝにつきては、かゝるいみしきよのたからをしも、おのれひとりこゝろせばくわたくしものひめおきて

やみなむことのねじけがましく、あたらしくおぼゆるまゝに、さくらの花
のえならぬ色を、ひろく人にも見せまほしく、松がえの千代とほく、世に
もつたへまほしくて、こたみ名^(此度)におふその植松の有信にあつらへつけて、
桜の板にゑらしむるになむ、かくいふは木綿苑^(ゆふの)の千秋

古今集遠鏡（はしがき）

雲のあるとほきこずゑもとほかづみ

うつせばこゝにみねのもみぢ葉

此書は、古今集の哥どもを、こと／＼くいまの世の俗語に訳せる也、そも
 〳〵此集は、よゝに物よくしれりし人々の、ちうさくども（注釈）のあまた有て、
 のこれるふしもあらざるに、今さらさるわざは、いかなればといふに、
 かの注釈といふすぢは、たとへばいとはるかなる高き山の梢サトビゴトウツども、あり
 とばかりは、ほのかに見ゆれど、その木とだに、あやめもわかぬを、その
 山ちかき里人の、明暮のつま木のたよりにも、よく見しれるに、さしてか
 れはとゝひたらむに、何の木くれの木、もとだちはしか／＼、梢のあるや
 うは、かくなむとやうに、語り聞タリキせたらむがごとし、さるはいかによくし
 りて、いかにつぶさに物したらむにも、人づての耳ミミは、かぎりしあれば、

その山ちかき ↑かし
 この近き

語り聞せたらむ ↑か
 たりしらせたらん

ちかくて見るめのまさしきには、猶にるべくもあらざめるを、世に遠めが
 ねとかいふなる物のあるして、うつし見るには、いかにとほきも、あさま
 しきまで、たゞこゝもとにうつりきて、枝さしの長きみじかき、下葉の色
 のこきうすきまで、のこるくまなく、見え分れて、軒近き庭のうゑ木に、
 こよなきけぢめもあらざるばかりに見ゆるにあらずや、今此遠き代の言の
 葉の、くれなる深き心ばへを、やすくちかく、手染の色にうつして見する
 も、もはらこのめがねのたとひにかなへらむ物をや、かくて此事はしも、
 尾張の横井千秋ぬしの、はやくよりこひもとめられたるすぢにて、はじめ
 よりうけひきては有ける物から、なにくれといとまなく、事しげきにうち
 まぎれて、えしもはたさず、あまたの年へぬるを、いかにくくと、しば
 くおどろかさるるに、あながちに思ひおこして、こたみかく物しつるを、
 さきに神代のまさことも、此同じぬしのねぎことにこそ有しか、さのみ聞
 けむとやうに、しりうごつともがらも有べかめれど、例のいと深くまめな
 るこゝろざしは、みゝなし山の神とはなしに、さて過すべくもあらずてな
 む、

○うひまなびなどのためには、ちうさくは、いかにくはしくときたるも、

ちかくて ↑ 近くて
 とほきも ↑ 遠きも

今此 ↑ 今この

くれなる ↑ 紅

この ↑ 此

尾張の ↑ (ナシ)

はじめよりうけひきて
 ↑ もとよりうけ引て

あながちに ↑ からく

ぬし ↑ 主
 して

こゝろざし ↑ 心ざし

物のあちはひを、甘しからしと、人のかたるを聞たらむやうにて、詞のいきほひ、てにをはのはたらきなど、こまかなる趣にいたりては、猶たしかにはえあらねば、其事を今おのが心に思ふがごとは、さとりえがたき物なるを、さとびごとに訳したるは、たゞにみづからさ思ふにひとしくて、物の味を、みづからなめて、しれるがごとく、いにしへの雅言みな、おのがはらの内の物としなれゝば、一うたのこまかなる心ばへの、こよなくたしかにえらるゝことおほきぞかし、

○俗言は、かの国この里と、ことなることおほきが中には、みやびごとにかかきもあれども、かたよれるゐなかのことばゝ、あまねくよもにはわたしがたければ、かゝることにとり用ひがたし、大かたは京わたりの詞して、うつすべきわざ也、たゞし京のにも、えりすつべきは有て、なべてはとりがたし、

○俗言にも、しなぐのある中に、あまりいやしき、又たはれすぎたる、又時々*のいまめきこと*ばなどは、はぶくべし、又うるはしくもてつけていふと、うちとけたるとのたがひあるを、哥はことに思ふ情のあるやうのまゝに、ながめ出たる物なれば、そのうちとけたる詞して、訳すべき也、

いにしへの雅言みな
↑古へのみやびごと
皆

おほき ↑多き
みやびごと ↑雅言
あれども ↑あめれど
ことば ↑詞
ことに ↑事に
えりすつべき ↑はぶ
くべき

又時々*のいまめきこと*
ば ↑(ナシ)

詞して ↑詞をもて

うちとけたるは、心のまゝにいひ出たる物にて、みやびごとのいきほひに、
 いますこしよくあたればぞかし、又男のより、をう^女な^女の詞は、ことにうち
 とけたることの多くて、心に思ふすぢの、ふとあらはなるものなれば、哥
 のいきほひに、よくかなへることおほかれば、をうなめきたるをも、つか
 ふべきなり、又いはゆるかたことをも用ふべし、たとへばおのがことを、
 うるはしくはわたくしといふを、はぶきてつねに、ワタシともワシともい
 ひ、ワシハといふべきを、ワシーヤ、それはをソレーヤ、すればをスレーヤ
 といふたぐひ、又そのやうなこのやうなを、ソナコンナといひ、ならば
 たらばを、ばをはぶきて、ナラタラ、さうしてをソシテ、よからうをヨカ
 ロ、とやうにいふたぐひ、ことにうちとけたることなるを、これはたいき
 ほひにしたがひては、中々にうるはしくいふよりは、ちかくあたりて聞ゆ
 るふしおほければなり、

○すべて人の語は、同じくいふことも、いひざまいきほひにしたがひて、
 深くも浅くも、をかしくもうれたくも聞ゆるわざにて、哥はことに、心の
 あるやうを、たゞにうち出たる趣^{*}なる物なるに、その詞の、口のいひざま
 いきほひはしも、たゞに耳にきゝとらでは、わきがたければ、詞のやうを

言

ふとあらはなるもの
 ↑あらはなる物

ふし ↑こと

したがひて ↑よりて

趣なる ↑(ナシ)

しも ↑(ナシ)
 わきがたければ ↑分

がたければ

よくあぢはひて、よみ人の心をおしはかりえて、そのいきほひを訳すべき也、たとへば春されば野べにまづさく云々、といへるせとうかの、訳のはてに、へ、く、へ、く、と、笑ふ声をそへたるなど、さらにおのがいまのたはふれにはあらず、此下句の、たはふれていへる詞なることを、さとさむとてぞかし、かゝることをだにそへざれば、たはふれの答なるよしの、あらはれがたければ也、かゝるたぐひ、いろくおほし、なずらへてさとのべし、

○みやびごとは、二つにも三つにも分れたることを、さとび言には、合せて一ッにいふあり、又雅言は一つなるが、さとびごとにては、二つ三つにわかれたるもあるゆゑに、ひとつ俗言を、これにもかれにもあつることあり、又一つ言の訳語の、こゝとかしこと、異なることもある也、

○まさしくあつべき俗言のなき詞には、一つに二ッ三ッをつらねてうつすことあり、又は上下の語の訳の中に、其意をこむることもあり、あるは二句三句を合せて、そのすべての意をもて訳すもあり、そはたとへばことならばさかずやはあらぬ桜花などの、ことならばといふ詞など、一つはなちては、いかにもうつすべき俗言なければ、二句を合せて、トテモ此ヤウニ

その ↑ (ナシ)

さく ↑ 咲

せどうか ↑ せどう哥
いまの ↑ (ナシ)

詞 ↑ 趣

かゝるたぐひ、いろくおほし、なずらへてさとのべし ↑

(ナシ)

みやびごとは ↑ みやびごとには

分れたることを ↑ わけていふことを
わかれたるもあるゆゑに ↑ 分れたるも有

ゆゑに
ひとつ俗言 ↑ 一ッ俗言

其 ↑ その
そのすべての意をもて ↑ 其詞の意を